

麻衣谷を挟んで向かいの山から見た着藤家。急斜面に張り付くように建っている。一番手前にあるのが石倉



の手法で丹念に築かれてい
るが、神仏習合廃止の明治維
新という時代背景が、彼を
「木」から「石」へと振り立
てさせたのではないだろう
か。石は古来、日本人の信仰
の原点ともいえるもので、
石を「神体」とする神社は多
い。この石倉を見てみると、
石の積み方を見ても、
「石の積み方」は大工さんだ
う。倉の横にある母屋も、ま
た近くの麻衣神社の社殿も彼
の作だという。生涯、木と同
じく、築き上げたように思えて
きかい、生きてきた人が、な
く。

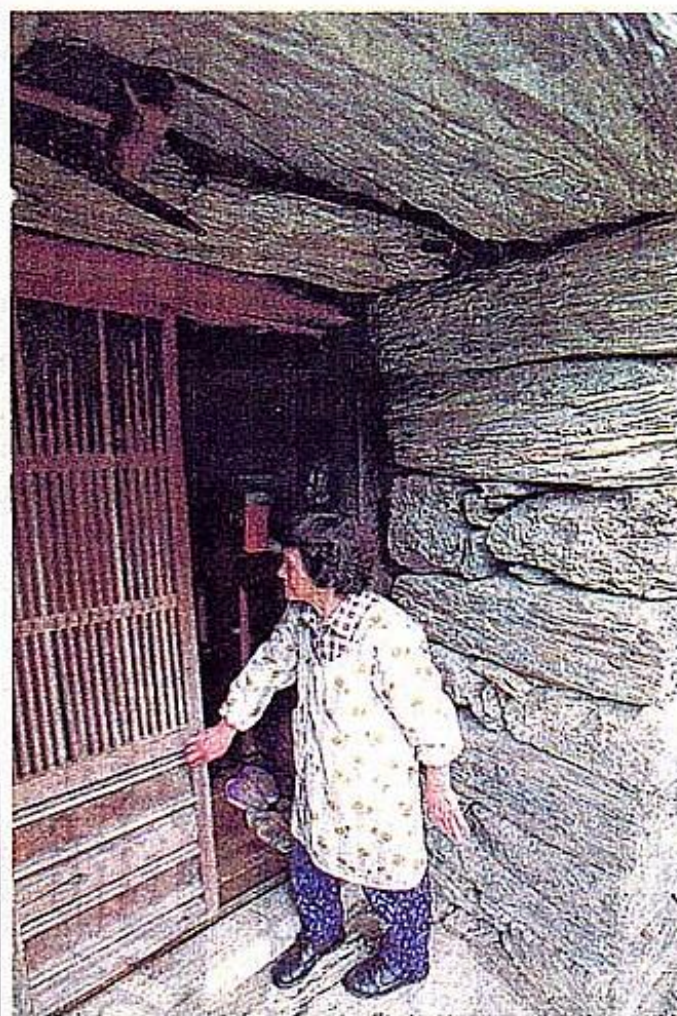
とくしま 見 築 物 再 発

異彩放つ「逆八の字型」

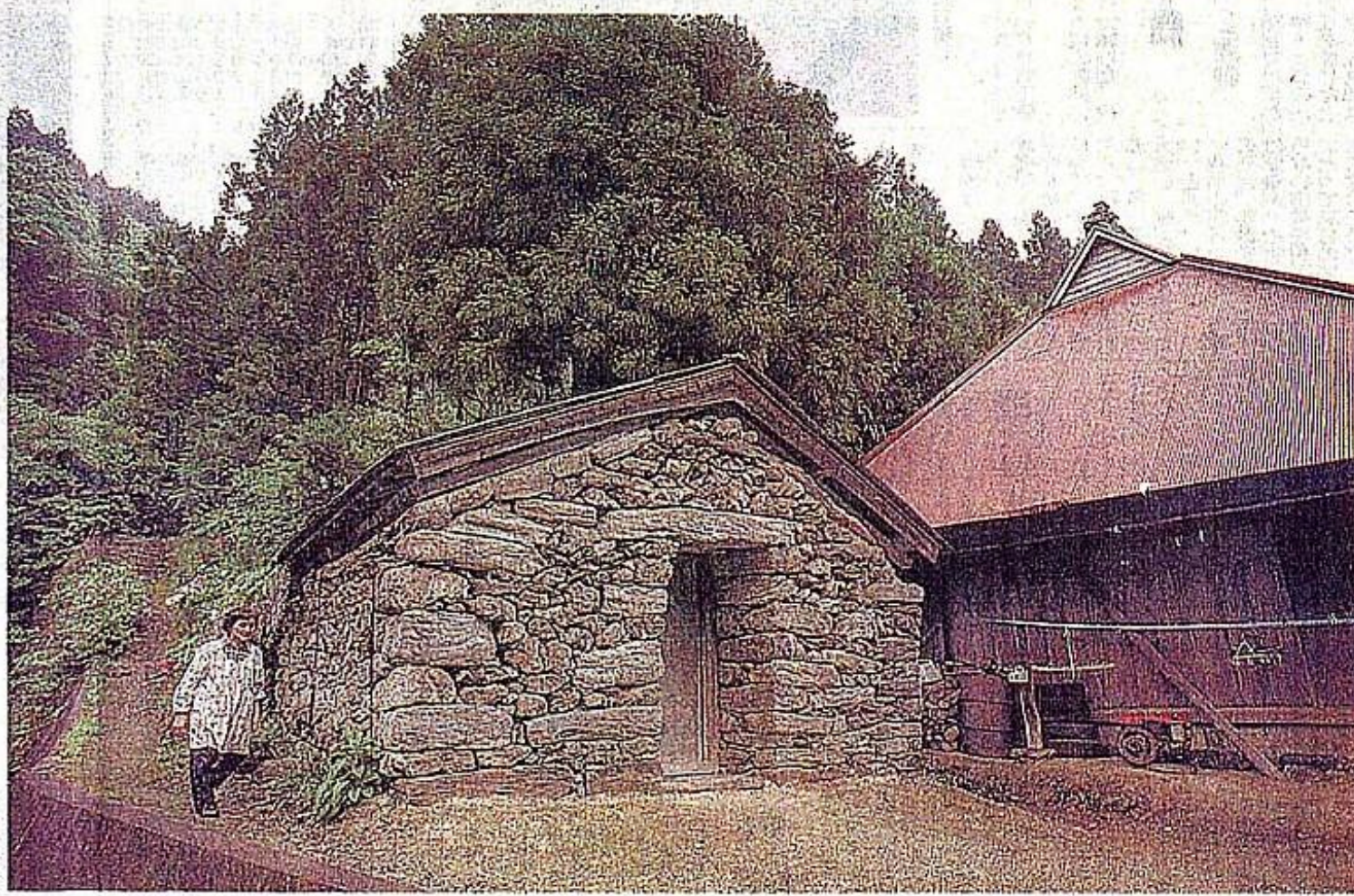
着藤家(美馬郡)の石倉

美馬郡本屋平村の村境に
ほど近い、麻衣(あまきぬ)
という集落の西はずれに、ひ
とまわ異彩を放つ石積みの倉
がある。着藤(ちやうとう)
忠信さん所有のこの倉は、地
元産の青石を使い、石と石の
間に粘土やモルタルを詰めな
い、いわゆる伝統的な積み
方だ。突然、石の建築を志したの
かが不思議だ。
彼は江戸末期に生まれてい
る。激動の明治維新を体験
し、着藤家の家系の中で、た
だ一人、神道に身を置き、宮
司も務めていたというから、
風雨にさらされたい工夫だろ
うと教えられた。なるほど、
うなずいてはみたもの
の、重くて硬
いに新たな息吹を注いだのだ。
いに兄弟としかいようがな
い。時を越えた感動があっ
た。

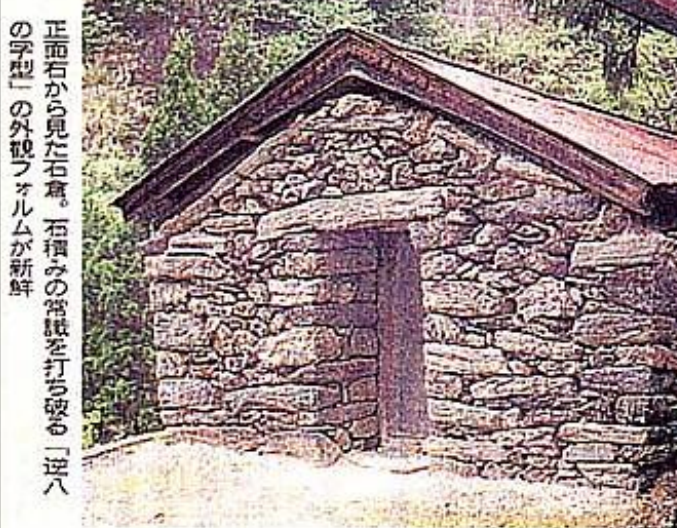
よく見ると、この倉の石積
みは大変奇妙である。壁は上
に行くほど厚がり、不安定な
「逆八の字型」をしている。
忠信さんによると、
「石の壁が長持ちするように、
風雨にさらされない工夫だろ
うと教えられた。なるほど、
うなずいてはみたもの
の、重くて硬
いに新たな息吹を注いだのだ。
いに兄弟としかいようがな
い。時を越えた感動があっ
た。



石倉の入り口。算木積みで築かれた壁の厚みは75センチもある



地元産の青石で築かれた石倉。木造の屋根を載せる置き屋根工法で、造形への飽くなき挑戦が石に新たな息吹を注いでいる



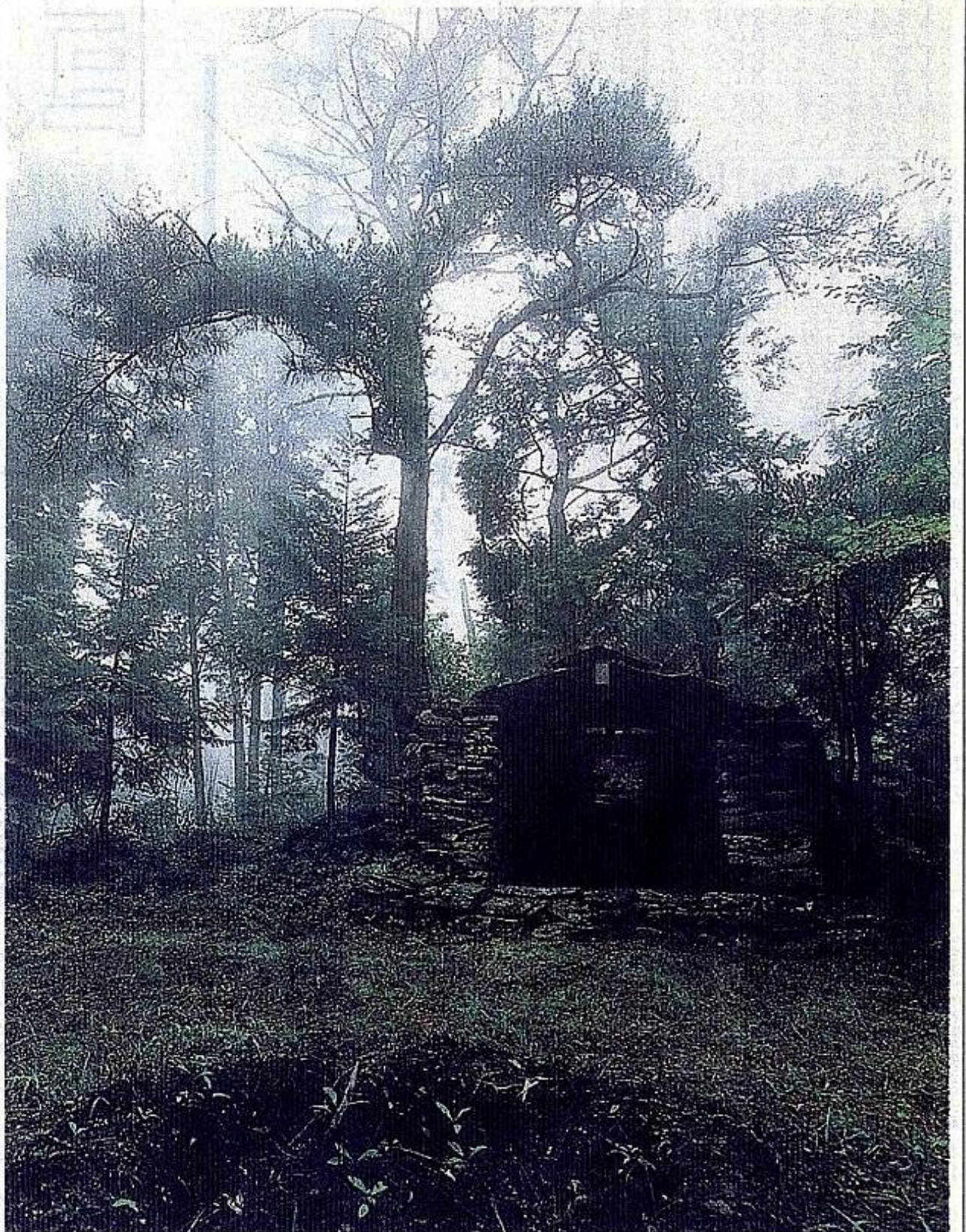
正面石から見た石倉。石積みの常識を打ち破る「逆八の字型」の外観フォルムが新鮮

「このシリーズは毎月第4土曜日に掲載します。」

▲メモ 着藤家の石倉 美馬郡本屋平村麻衣79。1877(明治10)年ごろ(聞き取りによる)、別荘松蔵氏(5代前の着藤家当主)が設計施工。外壁4面石積みに木造置き屋根工法、開口4・84、奥行5・00、平屋建て。内部は開口2・88、奥行3・74、天井高1・72。石積みは中央部が自然石の乱積み、コーナーと入り口が割石の算木積み。

とくしま 見 発 再 物 建

⑦



北の広場から見る地神さんの齋場。もやがかる木立の中、幻想的、神秘的な雰囲気が漂う

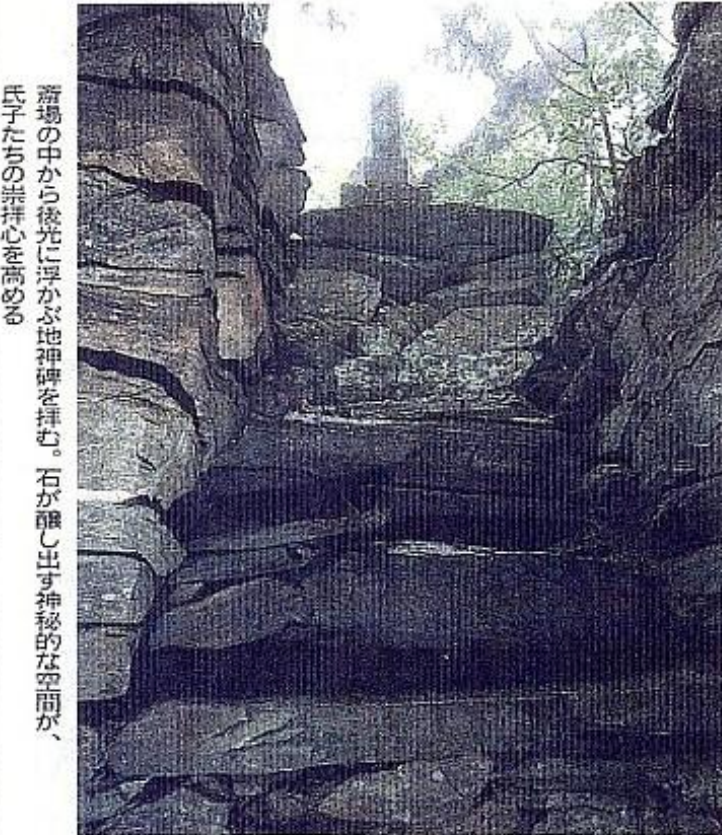
地神さん 1790(寛政2)年、徳島藩主・蜂須賀治昭公は各集落に地神碑を立てさせ、春秋の社日(春分、秋分に最も近い戌=つちのえ=の日)に地神祭を行うようにとのお触れを出した。それ以後、農家の人々は「地神さん」と親しみを込めて呼び、土の神、作物の神としてあがめた。春には作物の生育を祈り、秋には収穫のお礼参りをする。ご神体は五角柱をしており、和泉砂岩で造られたものが多い。五面には農耕にまつわる五神、天照大神、大己貴命、少彦名命、埴安媛命、倉稲魂命の名が刻まれ、正面(北面)に天照大神を配する。【引用文献・徳島県百科事典(徳島新聞社刊)】

三年前の夏、三好郡井川町の吹(ふき)という集落に立ち入った時、建物を配した珍しい地神さんと出会った。碑近づく、突き当たりの壁の中央に小さな穴が開けられ、光が射し込んでいた。その穴から地神さんへ、石の階段が

吹(井川町)の地神さん齋場

神秘的空間 青石が演出

見るのは初めてだった。しかも石積みの建築である。素朴な造りから、氏子たちの昔ながらの地神碑が見えてきた。何と見事な演出であろうか。北側から拝むという地神さんの特徴あるアプローチを巧みに生かした石の間は、とても神秘的

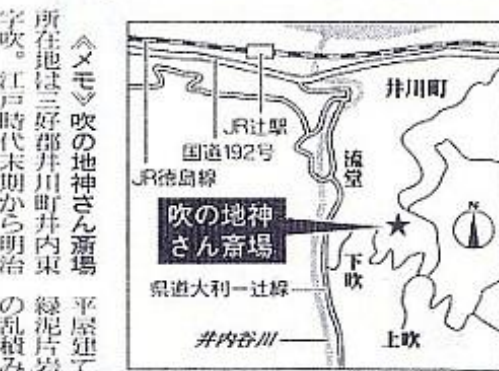
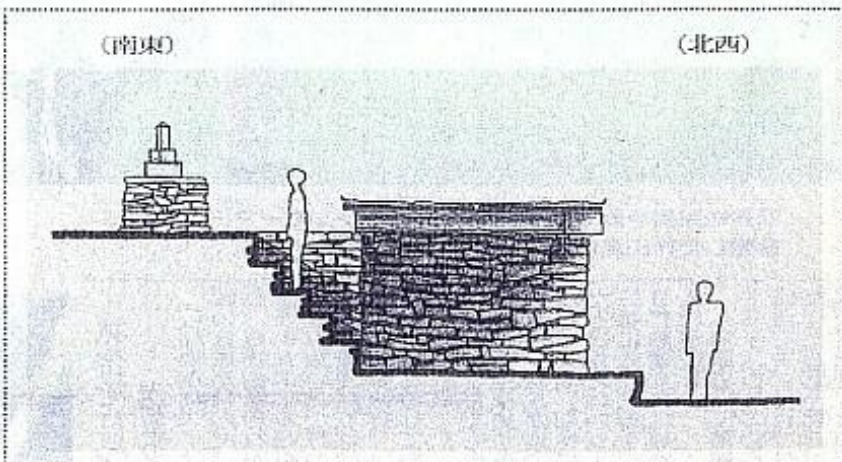


齋場の中から後光に浮かぶ地神碑を拝む。石が醸し出す神秘的な空間が、氏子たちの崇拝心を高める

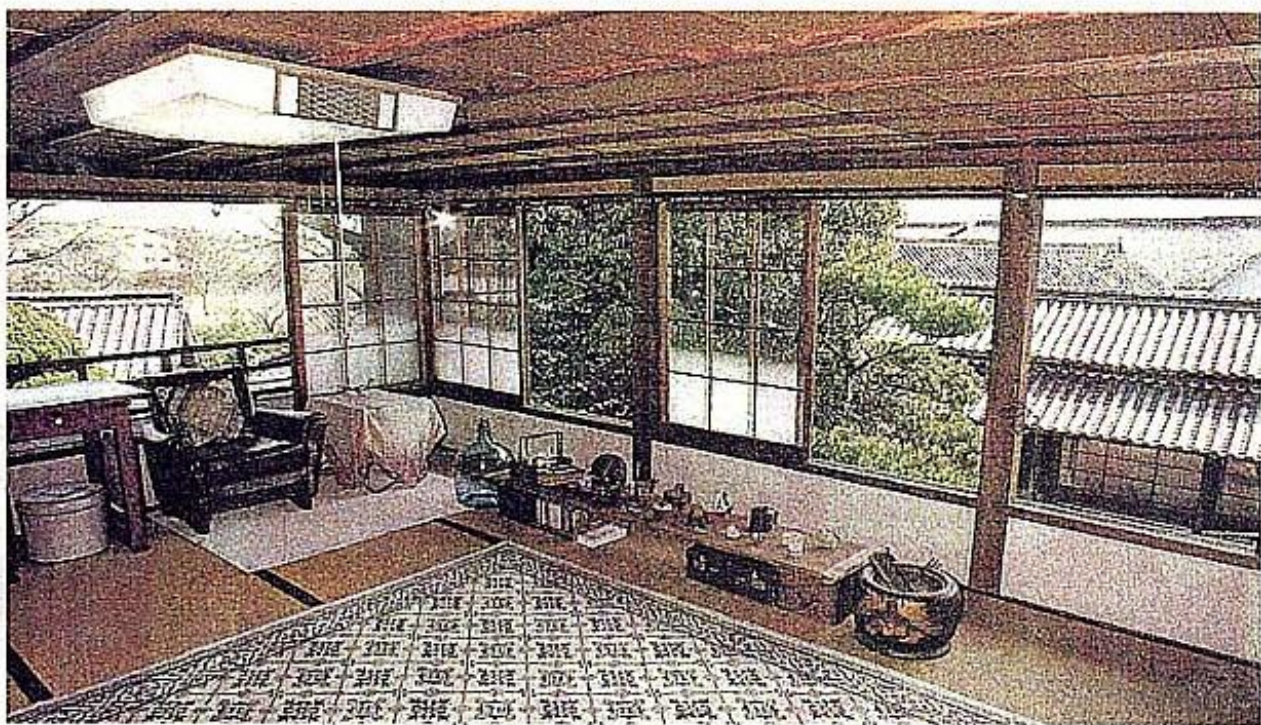


素朴で力強い齋場の石積み。青石を集め、運び、積み上げた氏子たちの魂が注ぎ込まれている

齋場の断面イメージ図



《メモ》吹の地神さん齋場 平屋建て、へん平な自然石の字吹。江戸時代末期から明治の乱積み。 地神碑は氏子中が1839(天保10)年に建立。外壁は3面青石積み、屋根は鉄骨造りに青石置き。内部の寸法は間口2・10尺、奥行2・40尺、鉄骨の梁下まで1・60尺。 にかけて建てられたと推測される。 地神碑は氏子中が1839(天保10)年に建立。外壁は3面青石積み、屋根は鉄骨造りに青石置き。内部の寸法は間口2・10尺、奥行2・40尺、鉄骨の梁下まで1・60尺。



代々子供部屋に使われてきた母屋2階の15帖の広間。1・8mと極端に抑えられた天井の高さと、外部に面した2面すべてがガラス窓の大胆な構成は、創造力をはくむ仕掛けのように思える



真(南東)の門より中庭を見る。右奥に見える2階建ての建物が母屋。建物の水平や垂直ラインの幾何学的な造形の中に対比するように配された自然石の構成が巧みである

とくしま 見 築 再 物 建

12

十七歳の犯罪、実の親による幼児虐待。毎日のように起る悲しい事件は、目撃者の心を痛くする。生活の中に自然を失った現代人を端的に表しているが、その因がどこにあるのかを分りやすく伝えてくれるものは何もない。学校教育の問題、いや親のしつけ方の問題など責任を押し

五感をばぐくむ仕掛け

割石家住宅(阿波町)

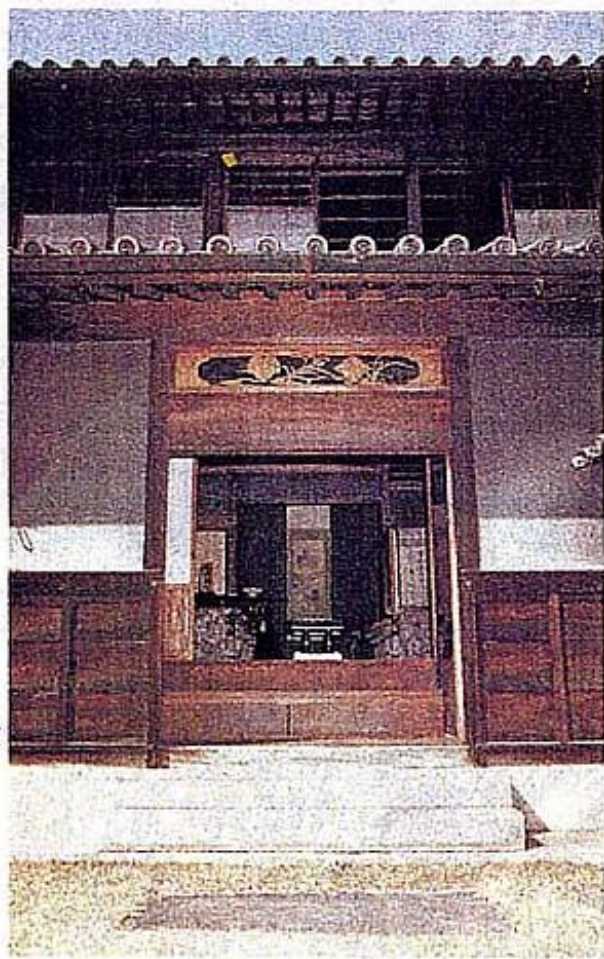
付け合っているようだが、設計を仕事とする私には、今進める住宅にもその一因があるように思えるのだ。この家に来ると、物質的に豊かになり過ぎて情緒や

は「など、設計のヒントが至る所にちりばめられている。二階の東南にある十五帖の広間は代々子供部屋として使われてきた。極端に抑

えられた天井の高さは何となく、おのずと外に目がいき、草木たちと対峙する。驚くべきことに、この部屋に低い天井がある。この部屋に低い天井がある。四季を通して自然の優しさや怖さを知り、子供は大人になっていく。今進められる住宅は、物質的な欲求をダイレクトに満たしてあげる。機能的な間

阿波町に入り、大久保谷川を越えた泉道、鴨門池田線の手前、四国山脈を背に築かれた幾層にも重なり合った懐かしい家並みが見えてくる。かつて造り酒屋を営んでいた割石家の住宅と隣接する。この家は若くしてアーティストたちの個展などに度々開放されている。彫刻家や染色家、現代アート作家など創作活動をする者にとって、ここは創造力をかき立ててくれる魅惑的な異空間なのだ。

今回紹介するのは、その横に建つ母屋。百年も前のこの建物は今も建築当時の初々しさを保ち、荒廃した現代社会や現代住宅への警鐘を鳴らし続けている。



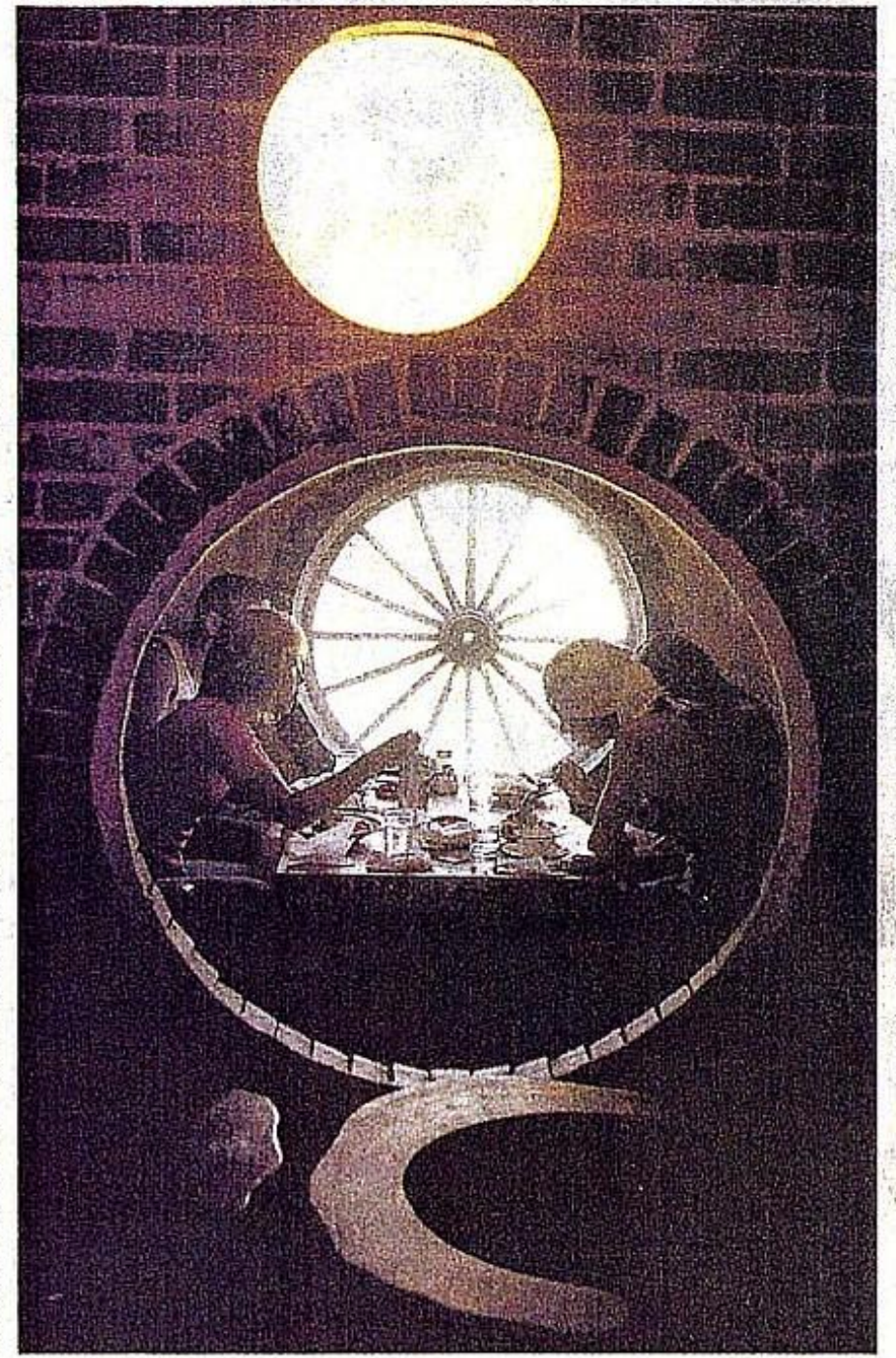
中庭より母屋の玄関を見る。正面の「玄関の間」は部屋中央に床を配置した、斬新な構成で来客をもてなす。



割石家住宅 阿波町元町24-1。割石一郎氏所有。1888(明治21)年、乾蔵から着工。ほぼ同時に母屋造営に取りかかり、1894年2月に未完の母屋に入居。母屋の完成は1898年3月。屋敷全体の完成は1901年。乾蔵と離れは他家より買い取り移築した。住宅は母屋、長屋門、離れ、乾蔵、西蔵、寝床、小座敷、帳場からなる。

人の一生に大きな影響を及ぼす住まい。この割石家住宅には、私たちが捨ててきたいくつもの幸せへのかがみ隠されている。初代易治郎氏が新藤村棟梁の協力を得て造り上げた感性あふれる住まいから、五感をばぐくむ仕掛けを凝み取りこれからの住まいを考えてみたい。(富田 眞二・日本建築学会会長 徳島市川内町松岡、写真は末澤弘太) 二のシリーズは毎月第4土曜日に掲載します。

手作りの温かさとともに、造形へのこだわりが強く感じられる喫茶「大菩薩峠」の店舗内部。
国道からも見える丸窓には、農作業で使っていた大八車の車輪がはめ込まれている。



※メモ 喫茶・大菩薩峠 阿南市福井町土井ヶ崎1-15-10。島利喜太郎設計・施工。1966(昭和41)年。着工、71年10月10日オープン。主棟は鉄骨造りにレンガ積み。十数年前に増築された作業室やブリッジの回廊、95年に造られたトイレは木造。オープン後も手を加え続け、いまだ完成を見ていない。現在、敷地奥の裏山に「石の空間」を建設中で、その一角に自邸で使っていた基礎石を利用した「石の建築」を計画している。店内を飾るテーブルやイス、カウンターの調度品もすべて島民の手作りである。

とくしま 建築再発見

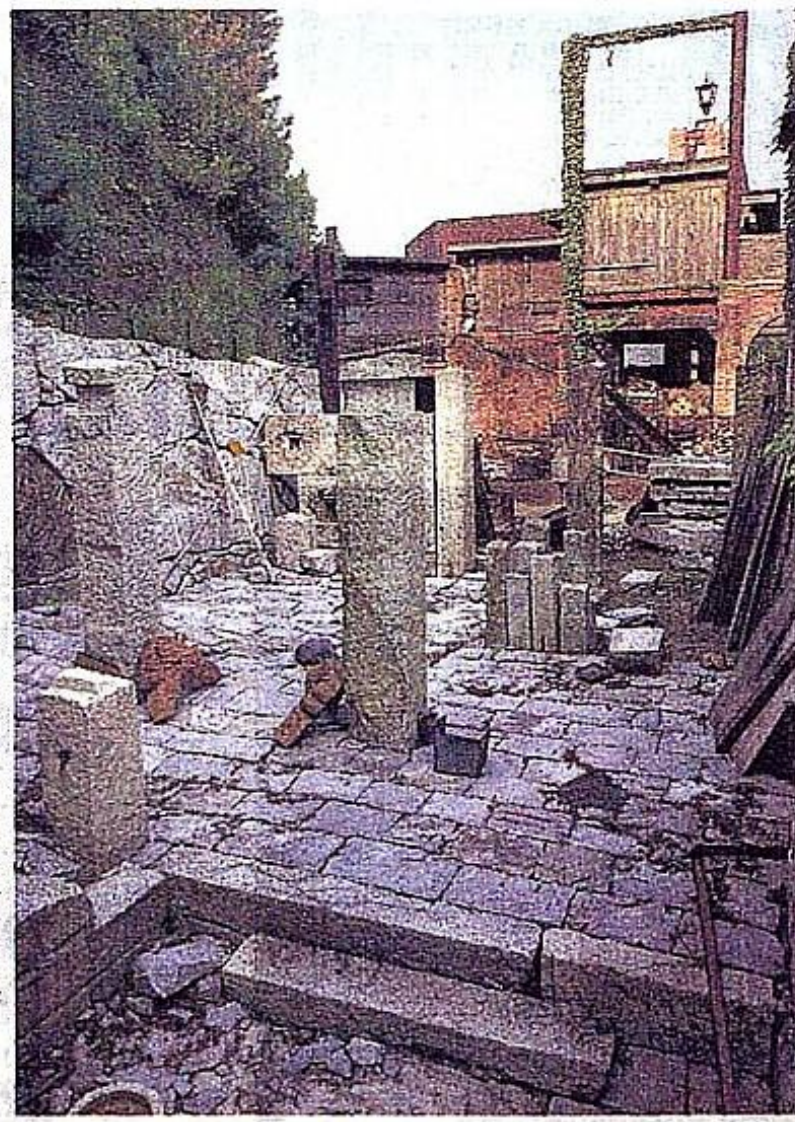
喫茶「大菩薩峠」

ロマンとエネルギー凝縮

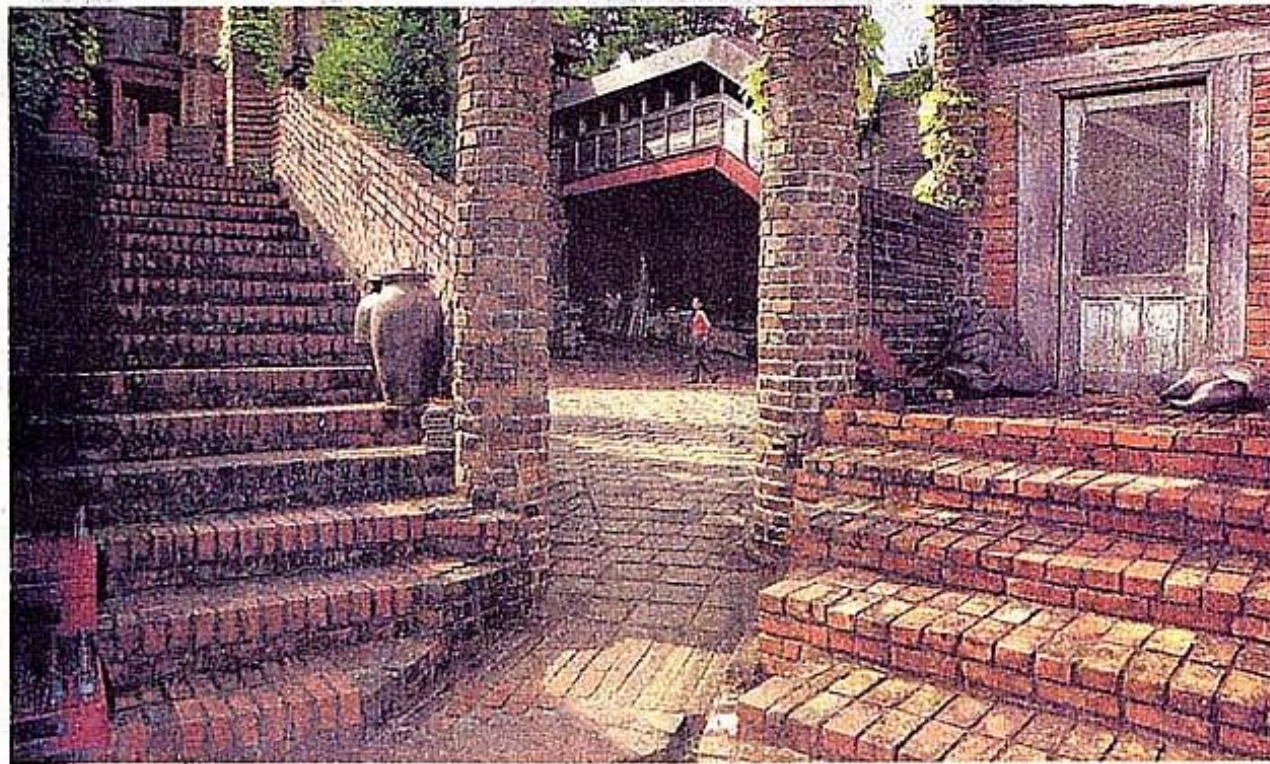
徳島市から国道55号を南に走り、橋を渡り過ぎるとすぐ右手に、ツタの絡むレンガ造りの喫茶店が目飛び込んでくる。欧州の城郭を思わせる「の建物」の名に強く惹かれる。コーヒー

「大菩薩峠」、オーナーは「好きで、人にもうまいコーヒを飲んでもらいたかった」ときつめ、また積み上げていくことになる。着工から五、六年目の一九七二(昭和四十六)年秋、「大菩薩峠」は待望の産声を上げた。戦後五十六年が過ぎ、建築の施工は、戦後、とれほど住人の手足を奪っていったのか。わが家の建築に自ら汗を流すこと、かつての

小学校舎の基
徳島市川内町松岡、写真
は末澤弘太
は末澤弘太
4土曜日に掲載します。



裏山に建設中の「石の空間」。乱立する柱は、地元で水門に使われていたものだが、島さんの息がかかる、新たな生命を得る。奥に見えるのは、木造の作業室



ブリッジの回廊で囲われた中庭は、床、壁ともレンガで埋め尽くされている。牟礼町や淡路島のレンガの中に手作りレンガが入り交じり、奥行きのある表情を見せる

とくしま 見 発 再 建 物

JR蔵本駅のすぐ南手に純木造三階建ての常磐(とくしま)旅館がある。今、地球環境や健康面から「木造」が建築のキーワードになっているが、明治後期から大正、そして昭和初期にかけて、木造三階建ての建物がかなり建てられてきた。戦災を免れた蔵本町にも、この建物以外に三棟も残っている。

今、都会では敷地の有効利用の面から木造三階建て住宅が小さなブームになっているが、戦後に建築基準法ができてから、木造三階建て禁止の時期が長く続いた。一九八七(昭和六十二年)の法改正で、構造計算の裏付けなど一定の技術基準を満たせば建てられることができるようになったが、そのような時代の流れの中で、この常磐旅館の三階客室は開かずの部屋になった。



常磐旅館の玄関。未来永劫(えいじゅう)を願った「常磐」の看板と、ガラスに刻まれた「旅館」の文字が大正ロマンを漂わす

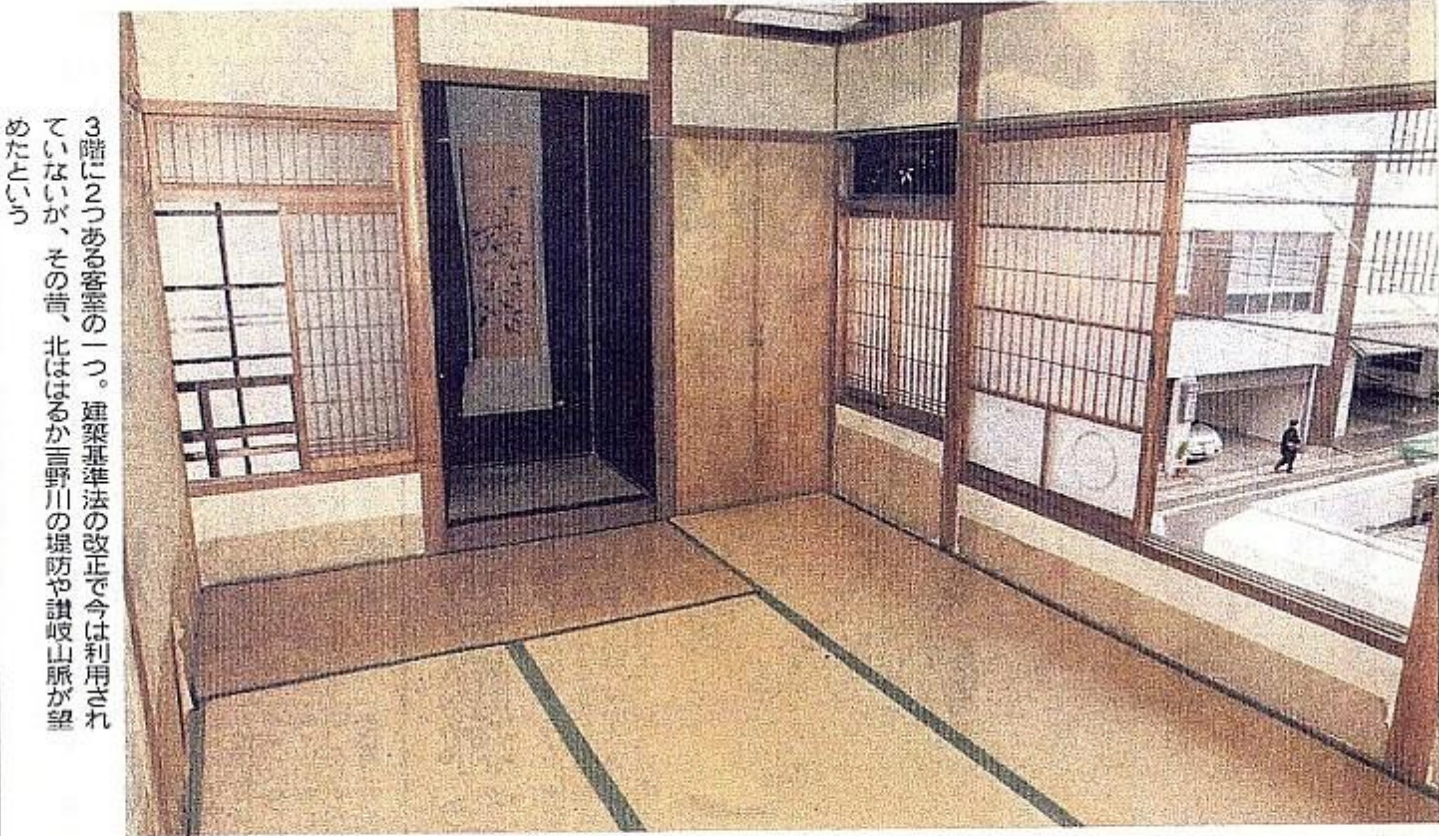
常磐旅館(徳島市蔵本町)

この旅館は交差点の一角にあり、北と西の二面が街に面している。大正時代の建築とは思えないほど、維持管理の行き届いたさわやかな顔をしているが、木造は手を入れ続けることでより輝きを増すことを教えてくれている。

年月を重ねていい顔に

この旅館は交差点の一角にあり、北と西の二面が街に面している。大正時代の建築とは思えないほど、維持管理の行き届いたさわやかな顔をしているが、木造は手を入れ続けることでより輝きを増すことを教えてくれている。

建物の家主のことを知り尽くした職人が守り続けてきたからこそ、今も美しい顔を写しているように思える。維持管理には費用がかかるが、朽ちれば朽ちるほど



3階に2つある客室の一つ。建築基準法の改正で今は利用されていないが、その昔、北はるか三野川の堤防や讃岐山脈が望めたといふ



長屋を思い起こさせるような北面の長い外観。2階部分は戦後、徳島大学医学生の下宿部屋として使われていた面影を残している



▲メモ▼常磐旅館
徳島市蔵本町1-15。
藤田成義氏所有。

美しさを感じさせてくれる材料は自然素材にかなわない。木や土、石には人の心の奥深くに語りかけてくれる力があるように思える。

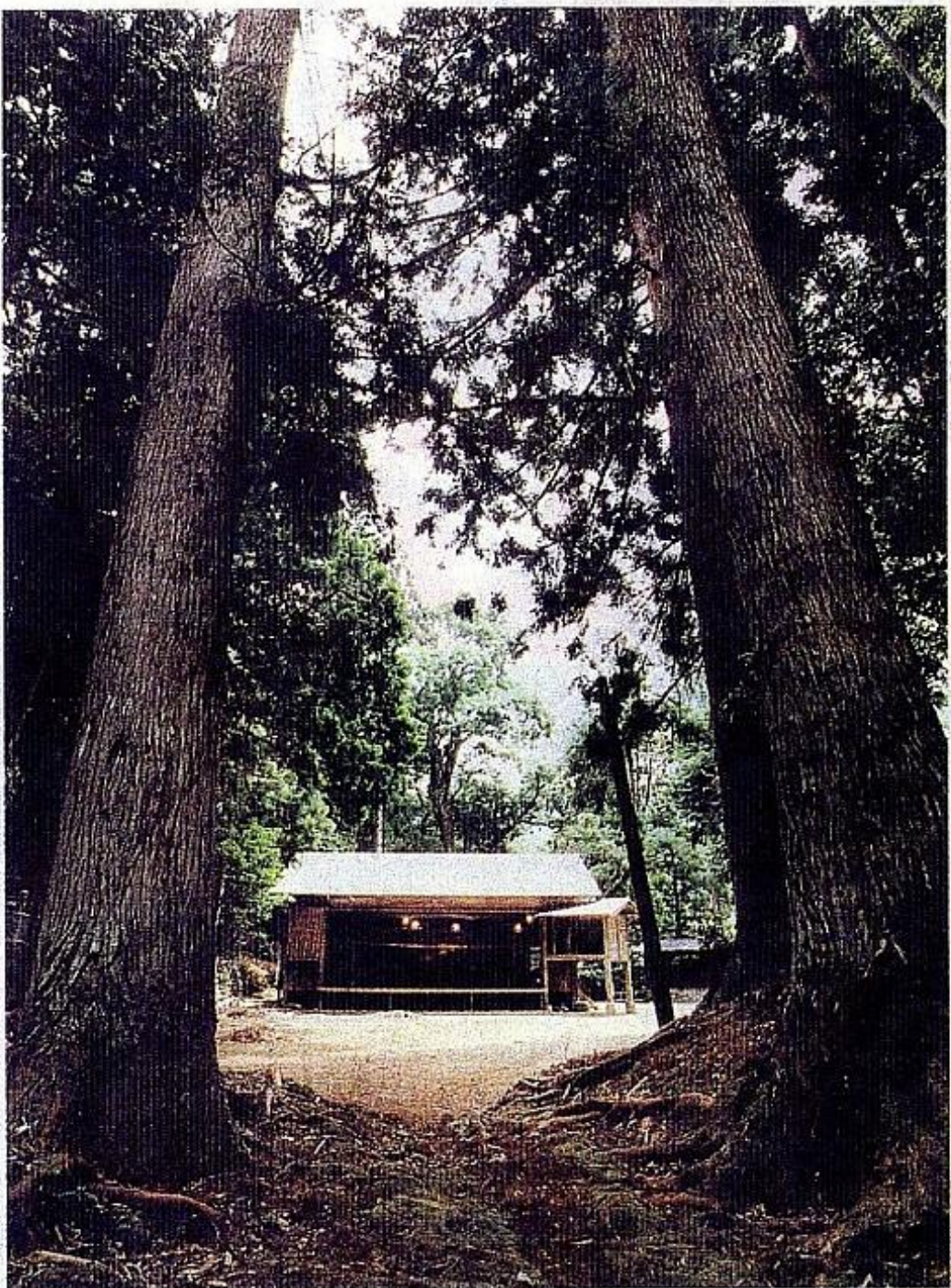
かかると、傷む前に手を入れることで費用は半減し、結果的に長持ちする。維持管理が少なく済む材料を好む現代人の反省するところである。できた時が最も美しい建物は飽きも早く、年月を重ねることに愛情がわく建築は、材料選びから始まるのかもしれない。

常磐旅館は大正中期に生まれ、戦後、徳島大学医学生の下宿部屋への大改修など、かなりの増改築がなされてきた。社会状況に合わせて、変わりながら生き続けてきたこの建物を見ていると、建築当時と違う姿に変わっていくのは悲しいことではなく、幾多の思い出とともにいい年寄りの顔になったという気がしてくる。(富田真二・日本建築学会会員・徳島市川内町松岡、写真は末澤弘太)

このシリーズは毎月第4土曜日に掲載します。

とくしま 見 発 再 建 物

27



木立の中にある舞台を正面から見る。向かって右側には太夫座が突き出し、手前の広場が観客席になる。

小浜大橋を渡り、古屋谷川沿いの一本道を車で十五分

川俣の農村舞台(上那賀町)

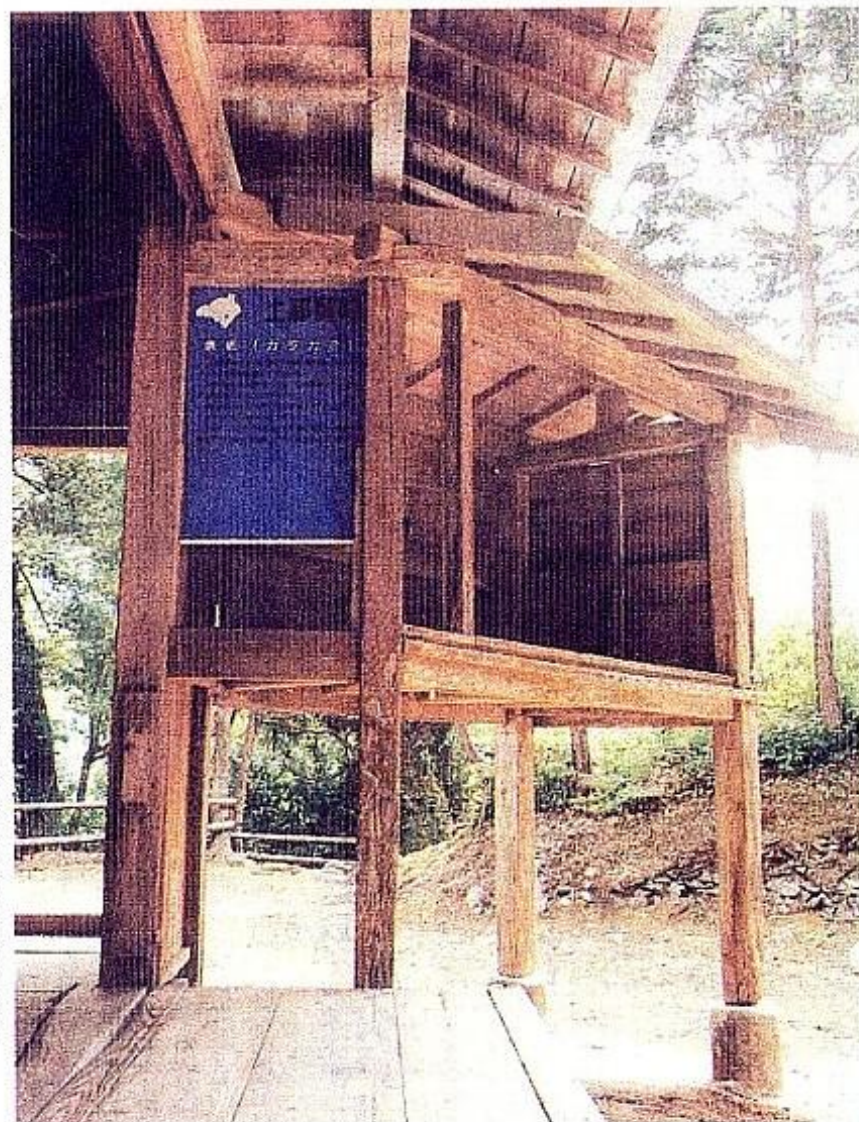
ふすま絵 彩色失わず

ほとど走ると、川俣集落にたどり着く。ユズ栽培を主産業とするわずかの十七戸の小さな集落である。

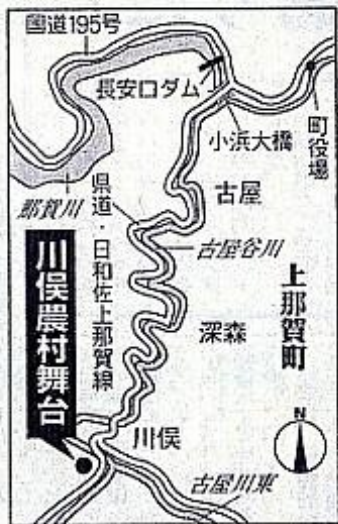
そのほぼ中央の小高い丘の杉木立の中に磯神社があり、その境内にこの農村舞台がある。県内に残るほかの舞台と同じように、戦前まではこの舞台でも人形芝居や素人芝居が演じられていた。しかし戦後、ラジオや映画などの娯楽に押さ

また、ふすま絵(唐紙)をしまっておく押し入れは湿気を呼ばない作り構造になっていたので、明治中ごろに描かれたというふすま絵はその彩色を今も失っていない。

川俣の舞台は一見、倉庫改修や増築は建物の宿命でもあるが、民家の古材を再利用する一方、正面外観の建物であるが、この前に立つと、人形芝居を見たい



舞台と太夫座の取り合い部を見る。大屋根の軒下に斜めに取り付く難しい納まりにも、センスの良さを感ぜられる。



《メモ》川俣の農村舞台 上那賀町川俣(下)前、磯神社境内にある。建築年代は明治初期(推定)で、1937(昭和12)年、屋根をカヤからトタンにふき替える。舞台とふすま絵は町指定有形民俗文化財。舞台の規模は間口9・68m、奥行き5・8mで、切り妻造り波トタンぶきの建物である。向かって右側には人形芝居上演時に太夫と三味線弾きの席となる太夫座が斜めに突き出す。91年12月7日、40年ぶりに人形芝居の復活公演が催された。



舞台内部。泥絵の具で描かれたふすま絵は、薄暗い明かりの中で鮮やかによみがえり、光り輝く。上につるされた5本の鴨居は「ふすまからくり」の装置であり、敷居は上演時に鴨居からつるされる

ニテイーの香りが、この建物をより美しく見せているのだらう。みんなの手で造り上げていく建築を、今はもう造ることができなくなつた。新しい材料が日々開発され、使いたい材料は世界のどこからでも取り寄せることができる時代であるが、高価な材料や特異な材料で着飾る現代建築から、この香りを感ぜたいことはない。建築は存在感が大いから見えが気になるものだが、作り手の4土曜日に掲載します。

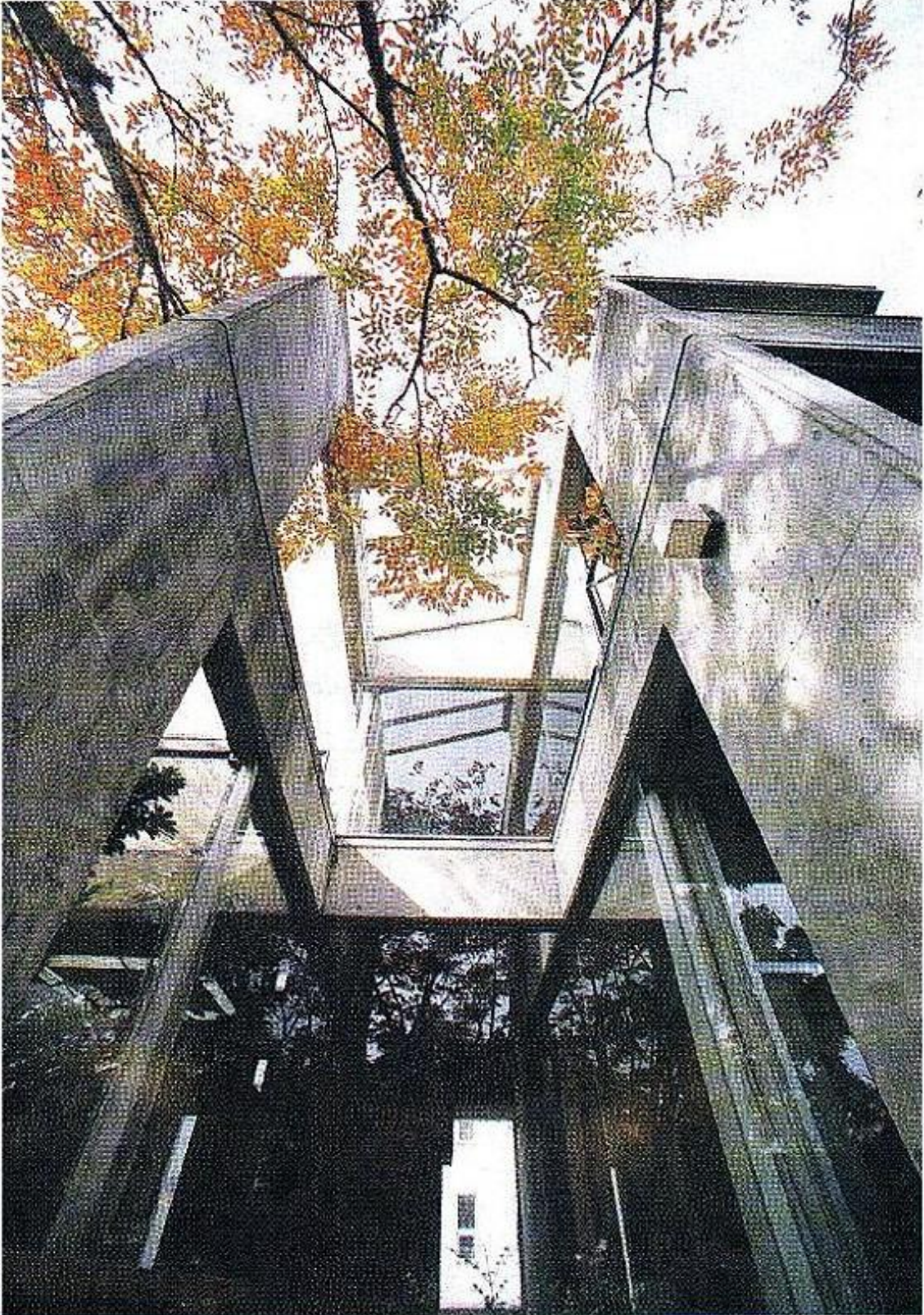
とくしま 見 発 再 建 物

龍野家は十六年前、南東
広町の住宅街の一角に建
られた建築家龍野文男さん
(左)のアトリエ兼住みい
である。龍野さん自ら設計
した。建築当初、大胆でエ
ニークなデザインは際立っ
た存在だったが、記憶し
ていたが、取材で久しぶり
に訪れると、大きな木々に
覆われ、意識しない通り
過ぎてしまふほど、すっか
り街並みに溶け込んでい
た。

敷地は東西十八、南北
十、狭い。街中でほゞ一
般的な広さだが、できる
だけ建物を西側に寄せ、東
側を広く残しているから、
とても百六十五平方の敷
地とは思えないほど広く感
じる。車一台分の樹木のた
めに開放したスペースは、
広々とて日当たりが良
い。そのためだろうか、降
り注ぐ光の中でケヤキやヤ

光と木々、日々の生活に潤い

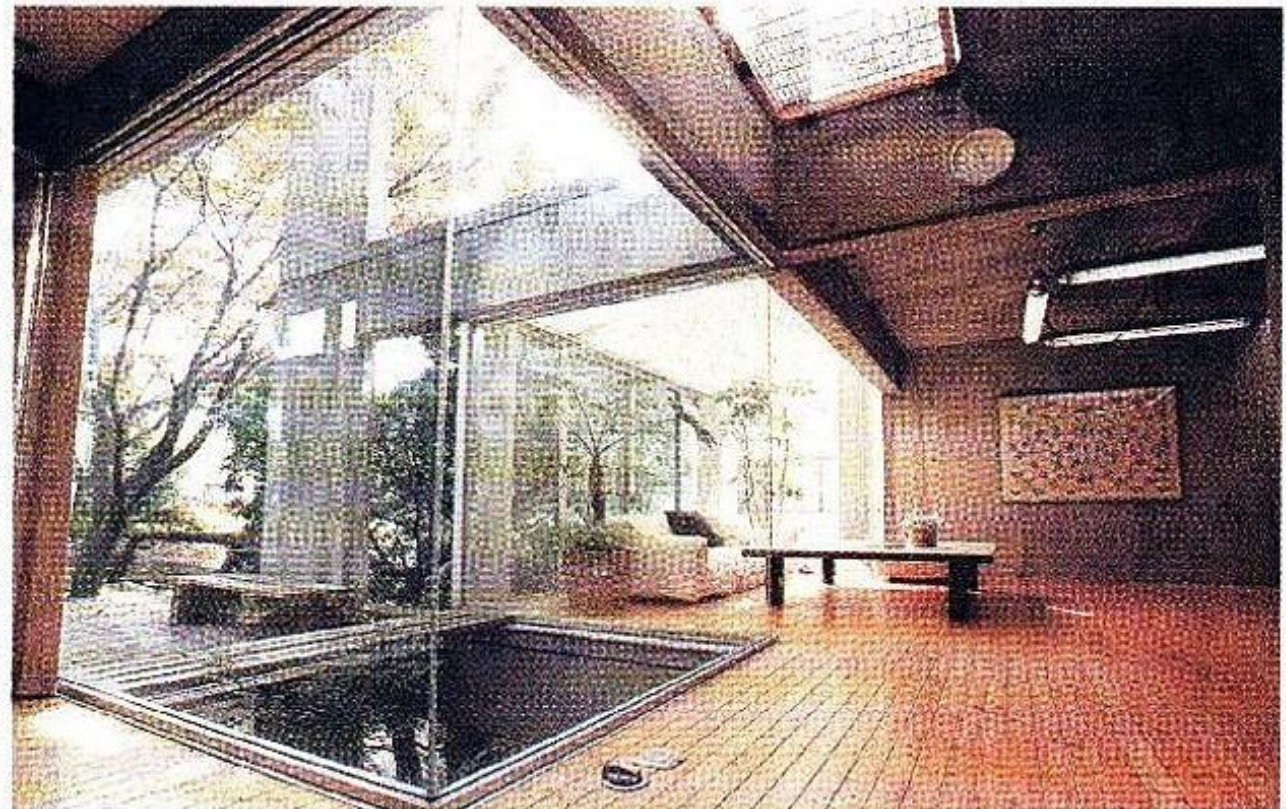
龍野家 (徳島市)



2階の「空中デッキ」から見上げた一対の壁柱と壁のはり。この発想によって開放的な内部空間を生み出している

龍野家では、一階はアト
リエ、二階を三階を住まい
にしている。
住居部分を仕切りのない
ワンルーム空間にするな
ど、至る所にプランの巧み
さが感じられるが、一番の
魅力は東側の庭に可かつて
大きく開かれた開口に居る
て、屋外に
いるような結
構に居るほど
庭に面する各階の壁面に
はコンクリートの壁を一切
設けず、すべて透明のガ
ラス開放している。この大
胆な発想が、あふれんばか
りの光と木々の緑を室内に
取り込み、日々の生活に潤
たのは、庭に立つ二対の壁

さを感じられるが、一番の
魅力は東側の庭に可かつて
大きく開かれた開口に居る
て、屋外に
いるような結
構に居るほど
庭に面する各階の壁面に
はコンクリートの壁を一切
設けず、すべて透明のガ
ラス開放している。この大
胆な発想が、あふれんばか
りの光と木々の緑を室内に
取り込み、日々の生活に潤
たのは、庭に立つ二対の壁



2階食堂側から見た居間。庭に向かって前面ガラス張りの室内は光と緑にあふれ、内と外との見分けがつかないほど開放的



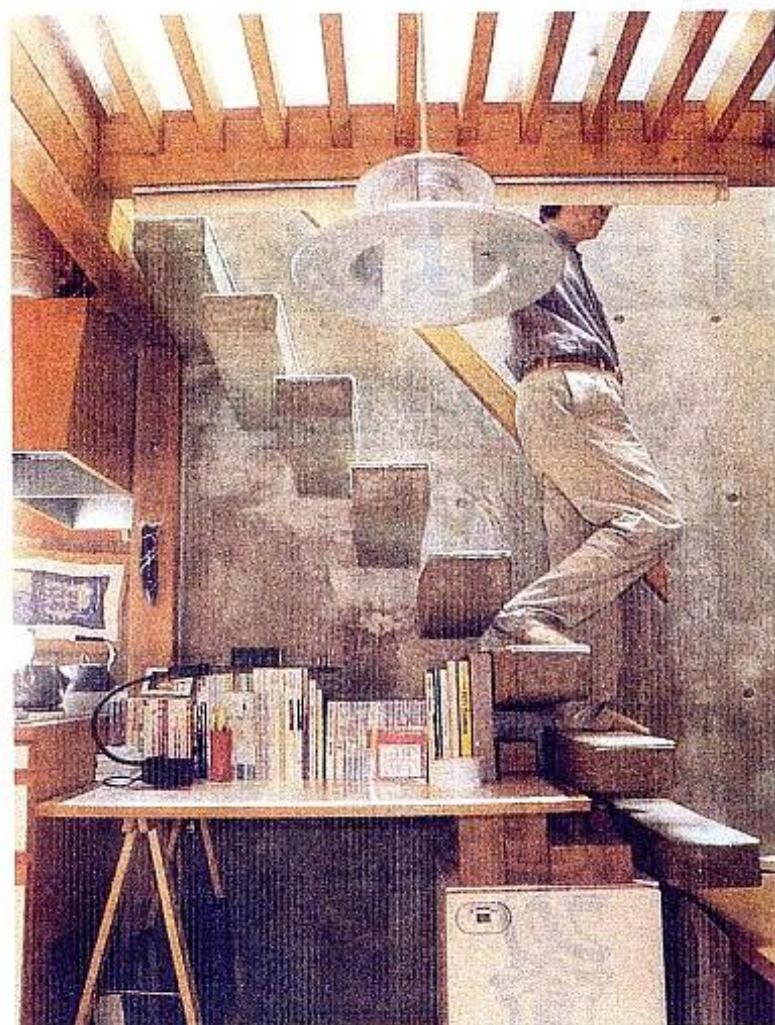
南東から見た全景。成長した木々が建物を優しく包んでいる

住と、それに向かって内部
から突き出した壁のほり
で、それらは木々への視界
を遮ることなく絶妙に配置
されており、外観の情動的な
デザインにもなっている。
ビルや大きな建物の設計
4十層目に掲載します。

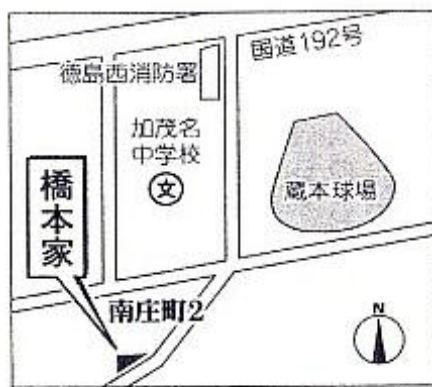
△メモ△龍野家 徳島市南東町1。龍野文
男・龍野建築設計事務所設計、可工務店施工。
鉄筋コンクリート造式3階建て延べ130平方
メートル(敷地165、1階42、2階58、3階30平方
メートル)。

はともかく、建築家に住宅
の設計を依頼するとは極
めて少ない。住宅は身近な
ものだから、建て主やその
家族がグラフィックなどに開
取りを書いて建ててもらう
ことが多い。それはそれで
よいのだが、子供部屋は何
年、この部屋は何層欲しい
という平面的な開取りや、
使い勝手などに終始してし
まる。同じような開取りで
も、立体的な工夫を凝らす
ことで、想像もつかない豊
かな空間を生み出すことを
この建物が実現している。
建築は平面でなく立体で
あり出上がるものはあく
まで二次元的空間である。
同じ六畳でも大井の高さや
形によって全く別の居る部
屋に生まれ変わる。平面で
は納まらない開取りも、高
さに変化を与えることで解
決できることもある。
住まいに便利さばかりを
求めても良い家になるとは
限らない。住宅の設計には
理詰めで解決できない何か
が潜んでいる。この家には
そのヒントがあらはめられ
ていた。

龍野さんは上那智町で生
まれたが、ダム建設によっ
て家を失い、小学四年の
と雲に徳島市内に引っ越し
てきた。幼いころ、日々目
にしていたおらがな榎海
をきつこの建物で取り
戻したかったに違いない。
(富田真二・日本建築学会
会員、徳島市川内町松岡、
写手は末澤広太)



2階から3階に上がる階段を見る。3階フロアのトップライト(採光部)から差し込む光が、階段の吹き抜けを通して2階に降り注ぐ



家族愛、近所付き合い、思いやり、忍耐、互感... 橋本家

蔵本球場(徳島市)の南西数百坪のところにあるこの建物は、建築家の橋本國雄さんが十七年前にアトリエ兼自宅として設計した。都市計画道路が敷地を斜めに横切ったことで残ったわずかに三十三平方坪(十坪)の三角地を購入し、自らの夢をかかえるべく設計に取り組み、直営で造った建物である。建築の世界で極小敷地の家として神話化されるほど有名な、約二十平方坪(六坪)の敷地に建つ「塔」の蔵る二層の住居空間である。三層しか取っていないのに、一階上がるのに三、四

橋本家(徳島市)

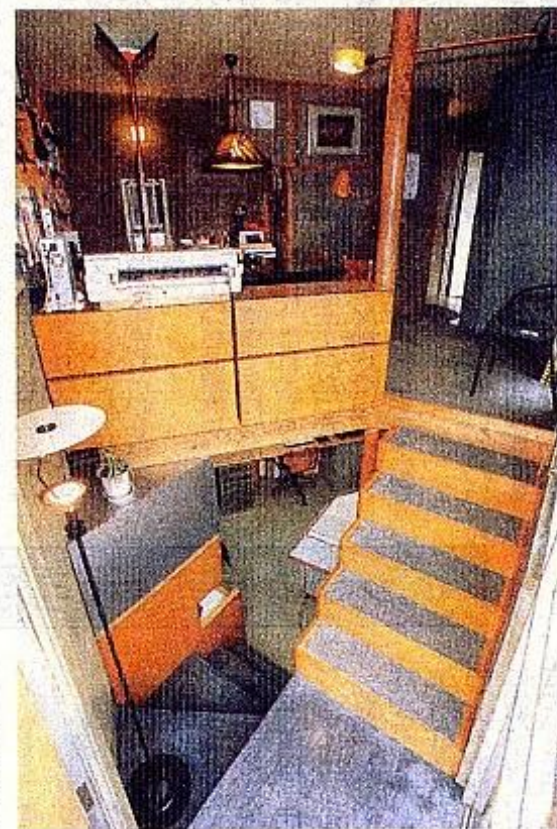
とくしま 建物再発見

極小敷地 巧みに活用

また、この家は各階の高さを非常に低く抑えているのが大きな特徴でもある。普通、住宅の階高は三層ほどであるが、この家は一、二階は一、二階しか取っていないのに、一階上がるのに三、四

段少なく済み、上下の移動を楽にしている。その分、階段のスペースも小さくできる。部屋の広さを確保するのにも役立っている。構造面も面白い工夫が施されている。アトリエと住居を仕切る床は遮音性の高いコンクリートでできていて、それ以外の床は木で

アトリエの玄関は道路と同じ高さで置き、室内の床を半階下らすことで歩行者と視線がいたずらに合わないようになっている。このことと通りに対して大きな開口部を設けることができ、オープンな雰囲気のアトリエをつくり出している。一方、住居の玄関は道路面より半階上げ、アトリエと別にするので気兼ねなく出入りできるようになってい



玄関から見た2層のアトリエ空間。上が接客の間で下に見えるのが半地下の作業場。玄関を兼ねた階段の吹き抜けが平面の狭さを補っている



【左】南側から見た外観。左側の大きな開口部分がアトリエの玄関で、右側の階段を上ると住宅の玄関がある【右】三角形の鋭角部分に当たる東側は極端に狭く、設計の工夫が特に感じられる

とくしま見 建物再発見

南側より見た外観。手前に見えるのは旧家屋の基礎石を敷き詰めたアプローチと、生活排水の水質を確認する装置として造られた池



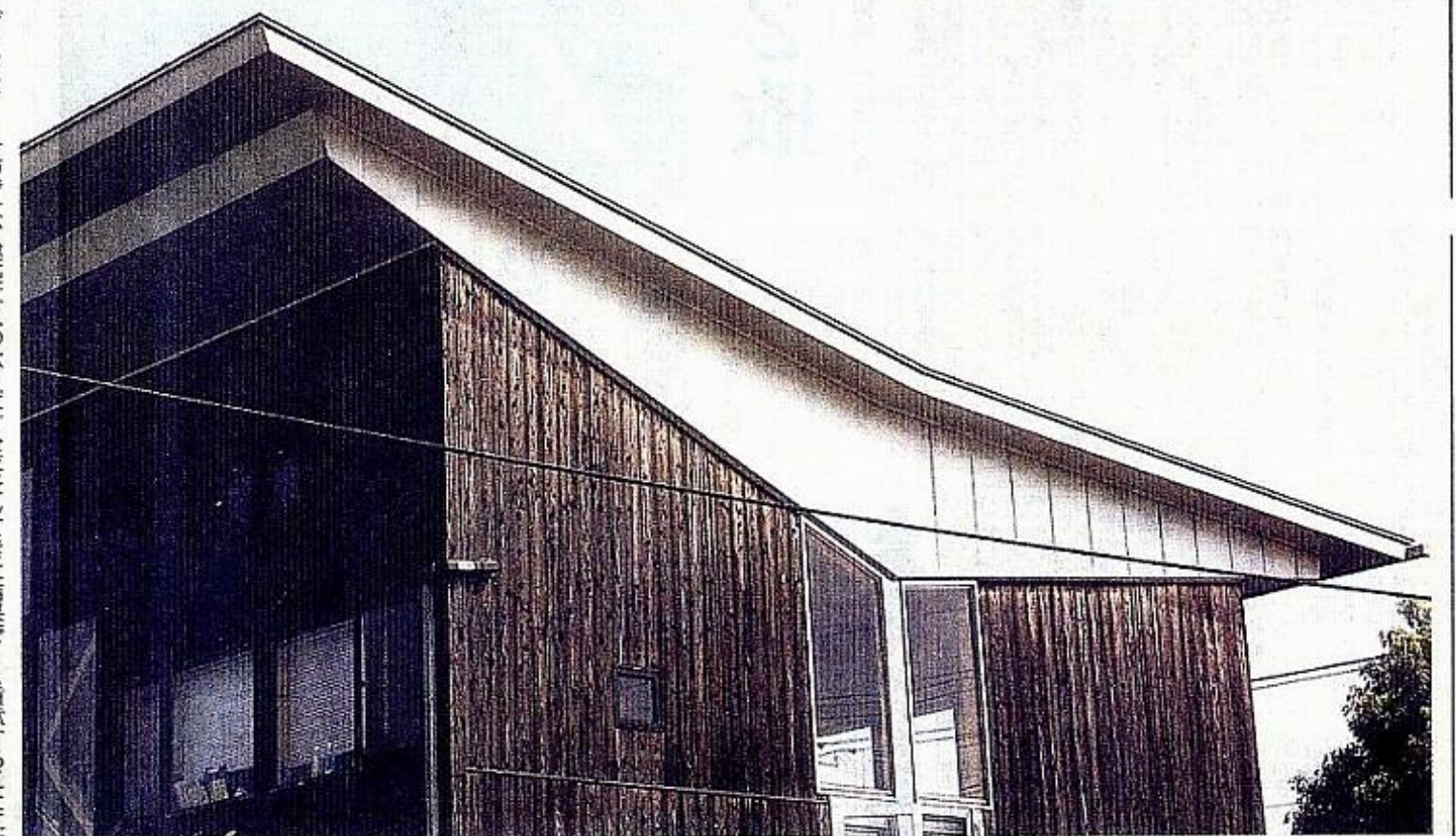
架構(骨組み)が新しい建築空間をつくり出していたのだ。

穏やかな田園風景の広がる石井町高原にある新居。夫家は、大きな露の黒い鳥が大地に舞い降りてきたような外観が印象的な建物である。建築家の新居照和さんとヴァンサンティさん夫妻の共同設計により、一九九六年に完成した。照和さんは学生時代に訪れたインドに魅せられ、七九年から七年間、B・V・Dの元で建築を学んでいる。そして知り合ったヴァンサンティさんとともに郷里の徳島に帰り、九一年に事務所を開設した。地元徳島で、初めて新築住宅の設計に取り組んだのがこの住まいである。完成直後に見せていただいた機会に恵まれたが、その時に、逆折れ屋根というユニークな形態が大変気に入ったことを思い出す。しかし、それは室内に入るとすぐに理解することができた。木造の常識を超えたデザインで、確かな理論といていくと、確かな理論

新居家(石井町)

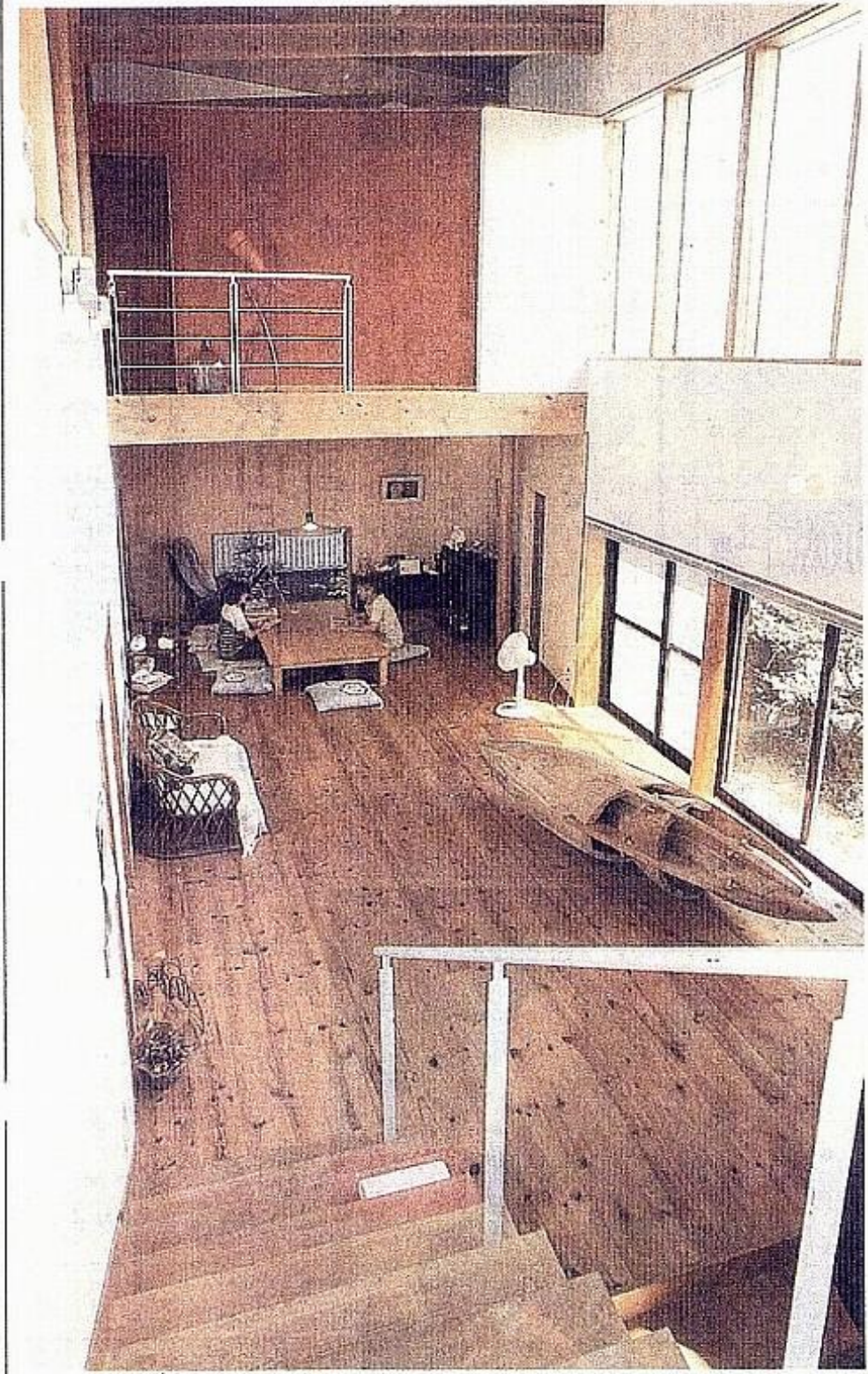
子供部屋があり、四季折々に彩りを変える山並みや刻々と移りゆく大空を見ながら、子供たちに大きく育ってほしいと願う設計者の熱い思いが伝わってきた。室内に大空を大きく取り込む手法としてデザインされた逆折れ屋根の形態は、思いやりや優しさをほぐす水や魚、水草への影響を観察し、放流前の水質を確認する装置になっている。設計している実感であるか、この建物を見れば、自然に生かされていることを忘れてしまい、恵み

空取り込む逆折れ屋根



逆折れ屋根のデザインが木造の新しい可能性を感じさせる。外壁の黒い部分は地場の焼き杉でシルバー部分はガルバリウム鋼板

はデザインセンスがとかくもてはやされるが、設計思想そのものが望まざる膨らみ、地球環境に取り返しがつかないほどの大きな負荷を与えてきた。人と自然の関係が薄れ、自然に生かされていることを忘れてしまい、恵みだけを享受してきた結果で古く貢献することになる。古く建物の保存再生手法とともに、木造の新しい可能性を追求することは設計者の役目だと思ふ。地場杉を使い、新たな建築空間を獲得した新居家にその可能性の光明をみることで、(富田真二・日本建築学会会員・徳島市川内町松岡、写真は末澤弘太)



西側の階段降り場から見た広間。大きな吹き抜けによってダイナミックな屋根架構が一望できる。右上は8.5メートルの連続窓

とくしま 建物再発見



広間の南面は全面ガラスで構成し、デッキを取り込んで内と外を一体化する。石綿板を敷き詰めた大胆な床が、新しい空間をつくり出している。石綿板の下には快適に過ごすための床暖房が設けられている

田園風景の広がるのどかな地に建てられたこの住宅は、住まい手である富野真(みこと)さんと妻深雪(ふかゆき)さんの共同設計によって実現した。若い二人に与えられた敷地は、母屋の建つ南側の一角だった。

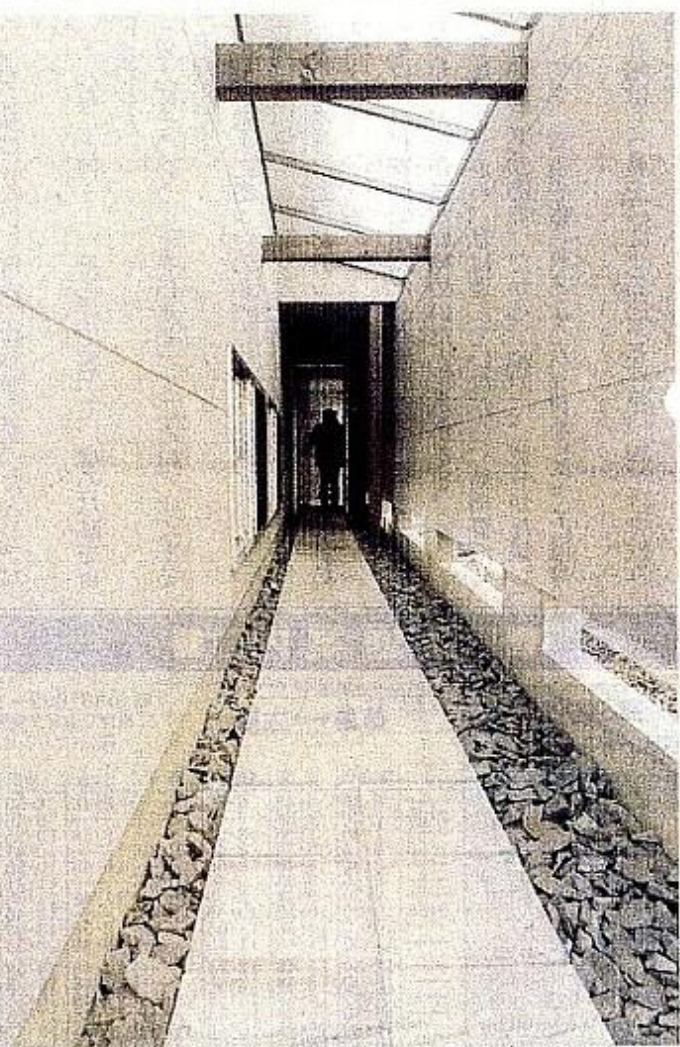
富野家(上板町)

母屋への日照配慮もさることながら、この外観デザインによって魅力的な内部空間をつくり出すことに成功した。屋根形態をそのまま表した室内は、低く抑えられた北側の天井が南側にいくほど高くなるので、南に向かっているのが開放感が増し、おほかた伸び

やかな空間を獲得しているにも思われる。細長い玄関へのアプローチもその一つで、母屋を目隠しするように設けられた東西に長い一枚の障壁が、訪問者へのアプローチとなる。この囲われた露地空間を通りながら、少年時代の情景をオーバーラップさせている。

このように心を癒やした五感に語りかけた。心のせいたくが何となく地よいか。心の時代といわれて久しいが、いま造られる住宅のまいた。住宅には「欲望」という怪物が潜んでいて、心のうちに重宝になり、住まいをき

望をかき立てられる商品はき算の美学を知っていた。後を絶たない。その魅力に負けて、知らず知らずのうちに重宝になり、住まいをき

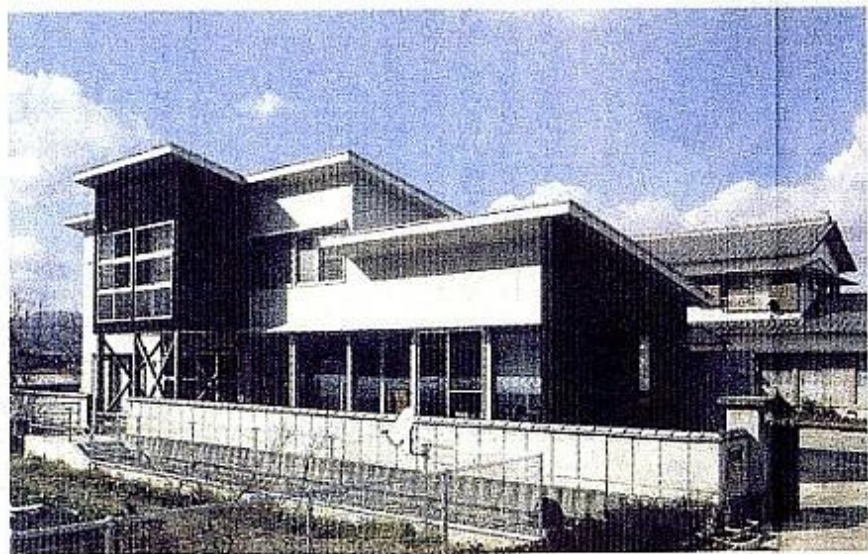


壁に囲まれた長いアプローチは、もてなしの心の表現であり、次の舞台への演出でもある

片流れの屋根で開放感

にしたのが多くは、いまだにその答えを見つけれない。おしゃべりやすいキッチンやバスルームなど、欲

方や生き方が見えてこない住宅が多い。「以前から個性的な家にあこがれていた。ほかには板一を選んだ。どちらも無



建築に直接縁のない若い二人の構想や設計を、背後から全面的にサポートしたのが建築家の釜内健二さんである。彼の的確な助言が悩む二人の道しるべとなり、確かなものへと導いていったに違いない。工事は多田英雄設計工房が担当した。建物細部の納まりを見ていると、多田さんもまた、素材な素材扱いの達人だと思ふ。

メモ

富野家 上板町瀬部。構想・設計—富野真・深雪。設計協力—共建築設計事務所、施工—多田英雄設計工房。大工棟りょう—横田勝年。設計期間は2001年2月~02年1月、施工期間は02年2~9月。本造2階建て延べ147.72平方(1階86.35平方、2階61.37平方)



南側より見る。片流れ屋根の外観が個性的。背後の母屋への採光配慮から生まれた素直な形でもある